

授業における発言の様相 — 解釈

— 中学校3年生の社会科と総合的な学習を事例に —

田代裕一

A Study on the Modality of Discussion in the Classroom Process:
Cases of S3 Social Studies and "Sougo Gakushu" Classes in Secondary School

Yuichi Tashiro

I. 発言表による授業の様相 — 解釈的研究

本研究は「発言表」を用いて授業の構造的全体像を明らかにし、授業の特徴・問題性を指摘するという、授業の様相 — 解釈的研究の一環をなすものである。今まで小学校1年生の授業事例から順に検討してきたが¹⁾、今回、中学校3年生の授業の段階に至った。中学校の授業は小学校に比べて、子どもの発言が少ないことが一般的傾向であるが、そのような中、本研究では、豊富なコミュニケーションのみられる中学校の授業事例を選んで取り上げている。このような授業を分析することで、子どもたちの豊かな相互作用と活発な学習活動がある授業の条件を追究することを最終的に目指している。

ここで用いる発言表とは複雑な授業を言語の観点から「見える」ものにしていくための手立てである²⁾。ここでその作成の手順について簡単に述べておく。発言表は基本的に、発言者名欄及び、発言状況欄からなる。発言状況欄には、授業記録上の全発言の長さを、縦の実線として記入する。本稿では授業記録(雑誌「考える子ども」掲載)での発言記録の二行分(一行…30字程度)を野線の実線の一単位分にしている。さらに、授業において用いられた重要なコトバを記号化して載せている。表中の発言で重要なものや、注目すべきものは線

で囲み、また、発言と発言の関係は矢印などで表した。右の発言内容の欄には、その授業での内容展開や言語的応答関係を示す上で、重要と思われる言葉を抽出して記載している(原文の約4分の1)。発言表の原版はB4サイズだが、ここでは紙面の都合上、縮小(縦56%、横62%)している。

今回、分析事例として取り上げるのは、「社会科の初志をつらぬく会」の夏季全国集会で提案された中学校3年生の社会科(公民分野)と総合的な学習の授業実践である。本会の機関誌「考える子ども」に掲載された提案の授業記録(授業記録集が作成された1978年から現在までの中から選択)を用いて検討する。ちなみに、筆者は1982年から「社会科の初志をつらぬく会」に参加して、提案の授業記録を検討する分科会に参加している。

II. 授業の分析

分析事例①

○M 中学校3年 N先生指導 社会科「農業と食料の問題」 1987年11月27日(生徒数は原授業記録には明記されていない。)原授業記録は「考える子ども」第31回夏季集会特集号 1988年(79頁~95頁)に掲載されている。以下の分節わけ、および分析は筆者による。

○授業の構造と分析(発言表を参照されたい。以下のカッコの中の番号は授業での発言の通し番号だが、原授業記録とは必ずしも一致していない。以下の事例も同様)

• 第1分節(1T~13水田)

教師が、本時の問題(米の自由化…アメリカから日本に安い米が入ることの問題)を確認している。子どもたちは問題を具体化した発言や、関連した発言をしている。

• 第2分節(14T~26T)

教師が、日本のコシヒカリ、タイ米、カリフォルニア米の形をOHPで見せ、さらにアメリカの米の値段について説明している。

• 第3分節(27T~48C)

教師が、日本の米とアメリカの米の値段を子どもに尋ね、その違いを確認

している。子どもからアメリカの米を買った方が安いという意見が出ている。さらに、タイの米と日本の米との値段を（粳米で）比較して、その違いを確認している。

・第4分節（49T～58T）

教師が、日本の米の値段とアメリカやタイの米の値段について思ったことや感想を尋ねている。輸送の値段があってもアメリカの米は日本の米に対抗できる、自分ならアメリカの米を買う、関税を高くするとアメリカの米も売れない、日本でも米は余っているので輸入することはあまりない、といった発言が出ている。

・第5分節（59T～75 水木）

教師が、朝日新聞のマンガを見せて、アメリカのRMA（全米精米業者協会）が日本に米を買うように要求していることを知らせ、日本が米の輸入を自由化したらどうなるか、と尋ねている。子どもたちは、日本の農家の人が困る、競争は当然で輸入してよい、農家が減るので国が仕事を探すべき、日本の景気が悪くなるのでアメリカに許してもらい、品質で勝負する、味は変わらないので勝負は見えている、企業もアメリカのためにつぶれたりしているのでアメリカも勝手なことはいえない、何%輸入してよいと決める、と発言している。

・第6分節（76T～83T）

教師が、OHPでRMAの主張を説明し、GATT（関税および貿易に関する一般協定）に言及している。さらに、RMAの主張どおりにすると、日本の農家がどれくらい減っていくか計算をしたグラフをOHPで提示している。子どもたちは、ちょうどいいあたりで輸入を制限する、資本主義でもあまり競争するのはよくない、値段を個人で決める、といった発言をしている。教師は、値段を個人で決めることに関連した説明をしている。

・第7分節（84T～90T）

教師が米の輸入に関する新聞の世論調査を取り上げ、反対が47%あると述べている。さらに、次の時間の内容（今後どうなるのかという疑問の追究）を示している。

○授業の発言状況

教師と生徒の発言回数比は1対1.5である。授業の最初と最後の場面での教師の発言は比較的長い。第5分節を除いて、教師は子どもの発言にその都度、積極的に対応している。第2分節、第3分節では、教師とC（不特定・多数の子ども）の略号、以下同様）との一対一的対応が多く、あまり発言者が増えていない。第5分節で子どもから3単位（発言記録の2行分約60字以内を罫線の実線の1単位分としているので、3単位は大体120字～180字に相当。以下同様）以上の長い発言が8回出ている。全体を通して、小山が6回、筒峰が5回、大山が4回発言している。水木は第5分節で、長い発言を2回している。全般的に多く発言している者はあまりいない。

第1分節の冒頭で、教師の発言が4回あり、計6単位の長い発言となっている。その後、4名の子どもが初回発言をしている。教師は、1単位の短い発言を3回して対応している。第2分節でも教師は8回発言して、子どもたちに各国の米を詳しく説明している。子どもたちは短く4回発言して感想を述べている。第3分節でも教師は断続的に5回発言して、短い質問を出したりしている。筒峰が3回、小山が2回、中野が1回、短く応えている。Cも9回、発言するなど、子どもたち全般が教師の問いによく反応している。第4分節で、教師は短く4回発言して、子どもの発言を促進している。6名の子どもの発言があるが、そのうち、初回発言者が5名で、今まで発言しなかった者も積極的に出ている。2単位の発言も3回あり、内容を伴った意見が出ている。第5分節は、教師の発言は最初と終わり方の2回のみである。その一方で、12名の子どもから計14回の比較的長い発言が出ている。4単位以上の発言も2回、3単位の発言も6回ある。また、大山・田山対他の子どもの間で輸入自由化をめぐる論争となっている。第6分節では、教師の発言は5回で、比較的長い（5単位、3単位の発言もある）。一方、子どもの発言は3回で、いずれも短い。第7分節は、教師の発言が4回あって、子どもに確認をしている。Cが3回、応えている。

以上のように、本授業は、教師が子どもに感想や予想を簡単にさせつつ、詳しく説明する箇所（第2分節、第3分節、第6分節、第7分節）、子どもが

列挙的に自由に発言している箇所（第1分節、第4分節）、子どもたちが積極的に議論をしている箇所（第5分節）といったように、明確な違いがみられた。子どもたちは教師の発問によく応答するだけでなく、子どもどうして積極的に意見を戦わせて、問題を追究していた。

○言葉・概念の展開状況

教師が、「重要な言葉」（ここでは、授業の内容構造をみていく上でポイントとなる言葉として、筆者によって選択されて、発言表に掲載された言葉を意味する）を出していることが多いが、子どもたちも味、不景気、品質といった、米の輸入自由化問題を追究する上で重要な言葉を出している。教師は5個の重要な言葉を含んだ発言を2回している。子どもたちは4個以上の重要な言葉を一度に多く含んだ発言を、第5分節で3回出している。

第1分節の最初から、教師は、値段、輸入、自由化、安いを用いて、本時の追究問題の確認をしている。子どもたちは安い、味を3回、自由化を1回用いている。教師も、子どもの発言に対応しながら、味、安いを用いている。米の輸入自由化を検討する上で、味という質の観点が出ていることは貴重である。第2分節でも、教師がまず味を用い、次に安いを2回の発言で用いている。子どもはこれらの言葉は用いていない。第3分節では子どもが、安いを3回用いており、第2分節を内容的に引き継ぎつつ、検討がアメリカの米の安さに絞られているといえる。第4分節では、子どもから安い3回、値段が2回、輸入と味が1回用いられ、より多くの追究の観点が出ている。教師はこれらの言葉は用いておらず、あまり内容へ言及していない。第5分節では教師が、安い、農家、RMA、輸入、自由化を用いて、アメリカ側の要求について子どもに意見を出させている。子どもからは農家が6回、競争、輸入が5回、安い、品質が4回、不景気が3回、値段が2回、味が1回出ている。子どもの発言では最初、農家、競争が出て、その後、不景気、品質が出ている。大山は3回の発言で競争を用いている。佐藤、田山、水木は1回の発言に重要な言葉を4個以上含んでおり、内容面を深めつつ、議論をしているといえる。教師は不景気を用いている。第6分節では、教師がRMAを2回、農家、自由化、値段を1回用いている。子どもからは競争が2回出て、ここは前の分節と内容面で連続し

ているといえる。第7分節で、教師は輸入を用いている。

以上のように、本授業で、教師は第1分節、第5分節、第6分節で値段、輸入、自由化、安い、農家、RMAなどの重要な言葉を多く出している。安いは子どもも授業全般を通して用いており、この授業の追究の基盤にある言葉だといえよう。一方、味（小山7）、競争（大山61）、不景気（小山67）、品質（田山68）は、子どもから出て、議論の中で次第に他の子どもにも用いられ、追究を深める上で重要な役割を果たしている。また、教師はRMAを3回用いているが、子どもたちは用いていない。このあたりに教師の意識と子どもたちの意識との違いがあるのかも知れない。

以上のように子どもたちは教師の詳しい説明を受けつつも、本時の問題を自分たちの考えを基にした議論によって、粘り強く深く追究して、理解を深めていたといえる。

分析事例②

○T 中学校3年 K 先生指導 社会科「外国人労働者問題」1993年9月9日（生徒数は原授業記録には明記されていない。） 原授業記録は「考える子ども」219号 1994年（89頁～101頁）に掲載されている。

○授業の構造と分析

・第1分節（1T）

教師が、「外国人労働者問題」に今後どのように対応したらよいかを討論すると述べている。子どもたちは「受け入れ推進派」、「判断保留派」、「受け入れ制限派1～4」の立場ごとに班をあらかじめ作っており、小黒板にその判断や根拠を書いている。教師は、今日は質問や討議をして、判断・対応を決めてもらおうと述べ、発言を促している。

・第2分節（2T～34T）

「受け入れ推進派」への質問や意見（ST、KY、MY、TN）が多く出ている。推進派の子どもたち（YT、YG、WB）も答えている。外国人労働者を受け入れないと輸入がへるとはどういうことか、不法就労者は法律を破っているのに、受け入れが少ないとなぜ外国から批判されるのか、といった点

について質問―応答や議論がなされている。

・第3分節（35T～51KY）

推進派から、アジアの国はお互いに助け合うべきだ、外国人労働者が増えると犯罪が増えるとは一概にはいえない、といった意見が出ている。これに対して、実際に犯罪は起きている、アジアに会社をつくったほうがよい、国がお金を貸してやる、といった意見が出ている。

・第4分節（52T～67T）

日本が外国人労働者を受け入れないと批判を受けるなら、批判した国が受け入れればよい（ST）、日本は本当に批判されているのか（TN）、という意見が出て、批判の存在について教師が補足説明している。さらに、日本の輸入と労働者の受け入れとの関係について発言が出ている。

・第5分節（68T～80T）

再び、推進派から、不況でもアジアの国はお互いに助け合っている（KM）という意見が出ている。これに関連して、国がお金を送ってあげればいい、利子つきだと却って負担になる、という意見が出た後、負担ならば借りずに自分たちでなんとかすればいい、日本もアメリカなどに助けられたから助けてあげるべき、といった様々な意見が出て議論になっている。

・第6分節（81T～97TE）

外国人労働者への差別や外国人労働者の犯罪が話題になり、働く場所がないから犯罪が増えるという発言（WB）が出て、外国人労働者に働く場所をつくるべきかどうかの議論が起きている。外国人労働者に単純労働しかさせていないと外国から非難されるなら、最初から受け入れないほうがいい、といった意見も出ている。

・第7分節（98T～101T）

教師は、今日納得できないことを「追究ノート」に書くように指示して、授業を終了している。

○授業の発言状況

教師と子どもの発言回数比は1対1.35である。第5分節を除いて、分節の最初の発言は全て教師である。教師の発言は全般的に多いが、特に第1分節で

は長い発言をしている。その後、教師は短い発言をして、子どもの指名や、発言内容の確認を行っている。最初の段階から子どもどうしの質問―応答があり、さらに「受け入れ推進派」対「受け入れ制限派」の論争が起きている。発言回数としては、WBが10回、YT、TN、KYが8回、STが6回、TEが4回と、特定の子どもの数がかなり多く発言している。発言者は計10名で、発言する者が限られている（クラスの規模は書いてないが、同校のHPによると、この学年は卒業時226名であり、そこから推計すると6クラス各38名程度のクラスだったと思われる）。全体では3単位以上の発言が11回あるなど、長い発言もみられる。また、第4分節のTNや、第6分節のWBなど、特定の箇所によく発言している子どもがいる。

第1分節では、教師が13単位の発言をして、本時の課題や活動について丁寧に説明し、確認している。第2分節は、初回発言者が7名と比較的多く、YT・YG・WB（受け入れ推進派）対ST・KY・MY・TN（受け入れ規制派）との間で質問―応答、議論が生じている。YTが4回、ST、TNが3回と複数回の発言がある。教師は13回発言しているが、その内、11回の発言が1単位の短いもので、指名や、確認、発言の促進、を行っている。第3分節では、WB対SG、YT対KYで議論が生じている。3単位の発言が3回、2単位の発言が2回ある。初回発言者は2名である。教師の発言は8回で、発言内容の確認や、発言者の指名、子ども（TE）の参加を促している。第4分節では、ST対KH、さらにTN対YG・KYで議論が起きている。特にTNは4回発言して、粘り強く述べている。この分節では初回発言者はいない。教師は7回、Cは4回発言している。教師は67発言で5単位の長い発言をして、地域の外国人労働者について詳しく説明している。第5分節は、子どもたちから7回の発言が出ている。その内、3単位以上の発言が3回、2単位以上の発言が4回と長い発言が多い。YT対KY・TEで議論が起きている。初回発言はTEのみである。教師は6回発言して、KYやTEの発言を促進している。第6分節ではWBが5回発言して、他の子ども（TE、SG、TN）と議論している。終わりの方でTEの5単位の長い発言がある。教師の発言は5回あるが、いずれも1単位で、子どもの発言を確認するものが多い。第7分節は、教師が3回発

言して、活動を指示している。WBも1回発言している。

以上のように、本授業では最初の段階から外国人労働者の「受け入れ推進派」と「受け入れ制限派」による議論が積極的になされている。特に、「受け入れ推進派」の4名は発言が多い。ただ、発言者はその後、あまり増えておらず、特に、「受け入れ留保派」の意見はあまりでていない。教師は最初に長い発言をした後、短い発言を継続して、子どもの発言の促進、内容の確認をして、議論を活性化している。

○言葉・概念の展開状況

この授業では、子どもたちがまず重要な言葉を出し、教師はその後で用いていることが多い。子どもから重要な言葉が次々と出され、議論が生じて、追究が深められているが、分節ごとに用いられる言葉にはかなり違いがみられる。

第1分節では、教師が長く発言して、不法を用いている。第2分節では、STとYTが収入を用いて質問―応答をしている。その後、KYが輸入、加工貿易を出して質問し、それに対してYGが批判、輸入、加工貿易、不況を用いて応えている。さらにYGに対して、MYは不法、批判、を用いて反論している。最後の方で、WBは貢献を用いている。教師は不況、輸入を用いている。このように、日本とアジアの収入の差、外国人労働者制限による日本の加工貿易への影響、不況の問題、不法就労と外国からの批判、国際貢献、といった外国人労働者問題に関する幅広い視点を示す言葉が多く出ている。第3分節では、KHが不況、自力、援助を用いている。教師も輸入、貢献を用いてその発言に応じている。その後、WBとSGが犯罪を用いて議論している。続いて、KYが不況、会社を出して、現地での会社の設立が話題になっている。最後の方で再び援助も出ている。教師は輸入、貢献、会社、援助を出している。第4分節ではまず、教師が会社、援助を用いている。その直後、STが収入、批判を用いている。この批判は第2分節で出た言葉で、話題が前に戻っている。その後、批判が子どもの5回の発言で用いられ、主要な話題になっている。特にTNは批判を3回の発言で用いている。教師も批判を用いている。その後、YTが、輸入、加工貿易を用いている。教師も輸入、会社を用いてYTに対応している。第5分節では、KHが不況、援助を出して、第3分節で検討された、不況

でも助け合うことができるかどうか、という話題を再び出している。KYも不況を用いて、KHをフォローしている。その後、TEは自力を出し、話題はアジアの国が自分で努力すべきか、になっていく。本分節では、子どもから援助が4回、自力が3回、用いられている。教師も1回、自力を用いている。第6分節では、WBがまず、犯罪、職場を出して、外国人労働者にとって職場が必要なことを主張している。本分節ではその後、職場が子どもの2回の発言で用いられている。WE93は、貢献、自力、不況、援助を用いて、国際社会で日本の今後のとるべき方向を述べている。一方、TEは、第2分節、第4分節で話題になっていた批判、輸入を出して反論している。教師は犯罪と貢献を1回ずつ用いて対応している。第7分節では主要な言葉は用いられておらず、内容面での検討はあまりされていない。

このようにみえると、本授業では主要な話題がくり返し現れているといえる。例えば、批判は第2分節で出て、第4分節で再び現れ、さらに第6分節の最後の方で出ていた。犯罪は第3分節、第6分節で出ていた。援助も第3分節、第5分節で主に出ていた。このように本授業は内容面でやや複雑な展開がなされていた。子どもの発言では、TNが批判を3回、WBが貢献、職場を2回、KHが不況、援助を2回、TEが自力を2回用いるなど、それぞれの子どもに、追究したい内容があると思われた。本授業では、このような個性的な追究に基づく活発な議論によって、徐々に、外国人労働者問題に関わる具体的事実が確認され、推進派と制限派の双方の立場の根拠が明確になり、外国人労働者問題への理解が深まっていったといえる。

分析事例③

○Y中学校3年 K先生指導 総合的な学習の時間「日系ブラジル人の故郷ニッポン」2002年6月以降 生徒数は37名。原授業記録は「考える子ども」282号 2003年(93頁～104頁)に掲載されている。

○授業の構造と分析

・第1分節(1T～15真弓)

司会の勝久が、本時の課題(日本で働いている日系ブラジル人の境遇を仕

方がないと思うか、許されない差別と思うか)について意見を出すように促している。仕方がないという発言が多く出ているが、差別だという意見も出ている

・第2分節(16勝久～38恵)

勝久が、まだ発言していない子どもに発言を促し、日本人も外国にいけば差別されるので仕方がない、字が読めないといって仕事に就かせないのは差別だ、今は日本も貧乏だから仕方がない、自分が会社の社長だったら会社の不利益になる人間はいらない、平等に扱わないといけなく、といった様々な意見が出ている。

・第3分節(39T～53敦志)

教師が、第2分節で出た発言をとりあげて、もし自分が会社の社長で、日本語のできない外国人が入ってくるとしたらどうか、と子どもたちに尋ねている。外国人も日本語を勉強すべき、差別はいけませんが、日本語がわからない人が自分と同じ給料をもらうのは納得できない、言葉が通じなくても役立つ人はいるので日本語のできないので雇わないのはおかしい、といった様々な意見が出ている。

・第4分節(54T～72T)

教師が、今の自分の気持ちを子どもたちに尋ねて、挙手させている(「差別だ」に7名、その他は「仕方がない」に挙手)。さらに、日本人が海外に行けば差別されるという、第2分節で出た発言について確認し、今まで、海外に日本人が移住した例を知っているかと尋ねている。子どもたちは、アメリカの姉妹都市コロロンバスに行っても差別されなかった、昔、中国にいった人がいるそうだ、と答えている。教師は昔、ブラジルに移住した人がいることを話し、次回、そのことを学習すると述べている。

○授業の発言状況

教師と子どもの発言回数比は1対2.4で、子どもの発言は多いが、あまり長い発言はない。また、司会の勝久を除いて、重複発言も少ない。全体的に列挙羅列的な発言が多いが、内容的に対立する発言や、多様な意見が多く出ている。発言回数の多い者としては、真弓と敦志が4回発言している。教師も、2単位

以上の発言は2回だけで、ほとんどが1単位の短い発言をしている。教師の発言は子どもの発言を促進したり、内容を確認していることが多い。

第1分節は、勝久が発言を促した後、8名の子どもが発言しているが、いずれも1単位の発言である。真弓は佑や教師と応答しながら3回発言している。第2分節は、12名の初回発言者がいる。司会の勝久が4回、正一が3回発言している。拓也は4単位の長い発言をしている。教師は5回発言して、子どもたちの発言を促進している。第3分節では、4名の初回発言者がいるが、すでに発言していた者も4名発言している。良人は3回発言している。拓也はここでも4単位の長い発言をしている。勝久と教師は敦志の発言を促している。敦志はそれに対して、2単位の発言をしている。第4分節では、教師の発言は10回と多いが、その内、9回は1単位の短い発言である。ここでは初回発言者はおらず、今まで発言していた敦志、亮太、佐和が2回、勇気が1回発言して、教師と対応している。

このように本授業は、特に第2分節まで、「列挙羅列的」に発言がなされているが、その中で、相対立する立場から意見が次々と出ている。第3分節では、問題の焦点が絞られて、やや発言者が限定され、比較的長い意見が出ている。第4分節では、教師と子どもとの一対一的なやりとりが多く見られる。以上のように、本授業では子どもどうしの議論までは起きていないが、多くの子どもが自分の意見・考えを明確に示している。

○言葉・概念の展開状況

子どもから、重要な言葉がよく出されて、徐々に共有されている。最後の第4分節は教師が、海外を多く用いている。

第1分節では、子どもから、本時の追究課題に直接関わる言葉である、仕方がない(6回)、差別(2回)が出ている。日本語は2回でている。康弘は景気、智香は仕事を用いており、経済的な局面も検討されている。教師は、差別を1回用いている。第2分節では、12名の子どもの発言で、仕方がない、差別が6回用いられている。このことは第1分節との連続性を示しているが、さらに日本人、日本語が4回、用いられており、日本社会との関連で問題がとらえられている。翔は海外を用いている。拓也は1回の発言で、仕方がない、景気、

雇う、仕事、会社を用いている。会社はその後、2名の子どもも用いている。良も1回の発言で外国人、日本人、海外、差別、仕方がないを用いている。教師は日本語を2回、仕方がない、差別、会社、外国人を1回、用いている。このように第2分節は検討の観点が広がっているといえる。第3分節では子どもから日本語が8回、勉強が4回出ている。教師も勉強を用いており、話題が外国人による日本語の勉強になっていることがわかる。その他に、子どもから仕方がないが4回、差別が1回出ている。真弓は1回の発言で、日本語、会社、外国人、勉強、日本人を用いている。貴成と佐和は雇うを用いて、相対立する立場から意見を出している。良人は3回の発言全てで、勉強を用いるなど、この点にこだわっていたことがわかる。第4分節では、教師が日本人、海外、差別を用いて、新しい話題を出している。教師はその後の発言で、海外を4回用いるなど、この点に追究の焦点を絞っている。子どもたちも海外を3回用いている。その他に、差別、勉強、日本人が1回出ている。

以上のように本授業では、子どもの方から、問題を追究する上で重要な言葉が多く出ている。特に、仕事、会社、日本語、勉強という言葉は、重要だったといえよう。また、教師が第4分節で多く用いている海外も、元々は第2分節で翔や良が出した言葉であり、教師は、子どもの発言によく対応して、活用しているといえよう。このように本授業は、列挙羅列的な発言形態であっても、多くの子どもたちが、自分の考えを十分に出して、多面的に問題を検討しているといえる。

Ⅲ. まとめ

本研究ではこれらの三つの授業事例を取り上げて分析した。事例①では、アメリカからの米の輸入自由化の要求について、最初、教師が豊富な資料を用意して説明し、子どもたちと問答を繰り返していたが、後半は、子どもたちが自由化について自分の考えを出して、積極的に議論していた。教師の説明と子どもたちの追究とのバランスがとれた授業であったといえよう。よく考えた、長い発言が多く出ていたが、特に、値段と品質の両面から、自由化への対応を検討していたことは注目に値する。事例②は、外国人労働者の受け入れについて

予め立場をはっきりさせた上で、授業の最初から、推進派と制限派が積極的に質問—応答、議論を行っていた。議論のポイントが多岐にわたり、前に議論された点が再び現れるといったように、内容が交錯している面もあったが、子どもの本音というか、強いこだわりをもとに、次第に追究が深められていた。ただ、「勝負をつける」議論が中心だったので、根拠を持って発言することが必要となり、授業での発言者はあまり多くなかった。教師は、子どもたちの発言を促進していたが、このあたりの、多くの立場の子どもを議論に巻き込むための手立てが課題と思われる。事例③は日系ブラジル人の境遇について「仕方がない」と「差別」とに別れて、子どもたちが自分の意見を多様な観点から十分に述べて、外国人労働者問題への理解が次第に深まっていた。

今回、3つの中学校の授業を分析したが、どの授業でも子どもたちが積極的に発言して、本時の課題に迫ることができていた。また、教師の工夫された指導や対応がみとれた。さらに、偶然かも知れないが、三つの事例で不況、(不)景気が「重要な言葉」として子どもたちに用いられていた。これは、経済的な社会状況を中学生の子どもたちも強く意識していることの現われかもしれない。このあたりの子どもが日頃から意識している点の解明も含めて、今後、さらに中学校での授業事例について分析を進め、豊かなコミュニケーションのある授業について探究を深めていきたい。

[注]

- 1) それらの研究は、拙稿、「授業における発言の様相—解釈 —小学校1年生の授業を事例に—」西南学院大学児童教育学論集第27巻第2号 2001年2月から、「授業における発言の様相—解釈 —中学校2年生の社会科を事例に—」西南学院大学人間科学論集第1巻第1号 2005年9月、において報告している。
- 2) 発言表は、西南女学院大学の中村亨教授が考案したもので、筆者らは、その改良や応用的開発を行っている。

T中学校3年生 K先生指導 社会科 ②
外国人労働者問題 1993年9月9日

発言者	発言内容	発言内容の一部	分
I	あえて公社の進出、産品の販売	らよと聞のことでいいですか	4
I	「輸入が激る」だろ、だから	「他の国から批判を受ける」と 批判した国が、受け入れて	
I	おしる送り出し国、労働力を	批判する国、豊かといえない国 日本は豊かされているんですか らよと聞のことでいいですか	
I	ちよとYG君のなかたをする 国産 受入れていこう 意向 東南アジアあたり、批判はある	批判されないからいい 批判されないからいい	
I	人は来てはいけないということ	くやしいとかそういう気持ち 他の国はどうでいいことでは 日本の輸入、東南アジアの国 にその労働者を受入れない 日本の加工貿易は成り立たない	5
I	日本がインドネシアから若手を その石炭の会社で働けばいい 労働者、人権管理法の改正 プログラムあり、日本労働者 受け入れ推進派の考え方、批判	その原料の場所で働けばいい	
I	KYさん	に就いていいますか、本紙 目に新しい言葉、胸が刺さって	
I	日本がお金を送ってあげれば	今の段階で不況になれば アジアはもっと貧しくなって 日本がお金を送ってあげれば	
I	TE君	調子ってどうで 東南アジアの国は貧しくなる	6
I	日本は自力で戦線立ち上がった	東南アジア お金を借りないと やっけないからかかっている 日本が自力で、これは嘘で 東南アジアの国々、覇者として アメリカ、日本を助けてくれた	
I	TE君、いかがでしょうか	かえて、逆説というのなら 自分たちでやっけていけばいい	
I	今のほどですか、KYさん	労働力を日本に持ってきて 助けるというやり方ではなく	
I	他のことでこれだけはいって このところはおかし	YG君の意見、産品輸出 差別ですぐに新えられる	7
I	人権の問題になってしま	「輸品が増える」よほど差別 強にしているよ、になっている 差を日と奪われたりするから 犯罪に走って、人権、働く場所	
I	犯罪に走るということはない	もう少し質問はいてください つまり労働者を作ってやる なぜその人達のために労働者 21世紀のリーダーになるため 「なんでもリーダー」 なぜ日本が国産の責任を担うに なれないか、国際貢献 一度も行ってない 自分のことしか考えない、差別	
I	では次の予定もあるので	日本の国内ではなくて そのアジアの諸国でやっても 別のことになりますけど 「労働者を受け入れる」 どう労働者を受け入れる 今から受け入れない方がいい 輸出、日本から製品を輸入	
I	国産分を売りたいね この資料を読んでみたい 納得できないこと、「ノート」	労働者受け入れ推進派	7
I	納得できるかな、終わりに	労働者受け入れ推進派	

T中学校3年生 K先生指導 社会科 ③
外国人労働者問題 1993年9月9日

発言者	発言内容	発言内容の一部	分
			7
*本授業で出された主要な言葉・概念とその記号			
★	不法 (不法就労者)		
\$	収入		
N	輸入		
⚙	加工貿易		
⚡	批判・非難		
Ω	貢献 (国際貢献)		
↑	不況		
ψ	自力・自分		
◎	援助・助け		
●	犯罪		
⌒	会社・企業		
P	職場・働く場所		
:なお発言者指名欄で網かけにしているのは「外国人労働者受け入れ推進派」それ以外は「制限派」である。			

Y中学校3年生 K先生指導 総合的な学習の時間 2002年6月以降

発言者	発言内容	発言内容の一部	分節
教師	孫太の中国ってのも正確だね		
児童	ブラジルから来てる人、顔が	差別時代とか戦国時代	
児童	日本あるブラジルに渡って	日本人と結婚したんじゃない	4
児童	自分の親で渡っていった人	あ、母親？	
児童	彼はそれについて学んで	うそ～	

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27

*本授業で出された主要な概念・言葉とその記号

- Ψ……仕方がない
- ∩……差別
- ◎……日本語・字・言葉（が話せない、が読めない、が分からない）
- ↑……景気・日本が金持ち
- ★……外国人
- ✂……仕事
- ……日本人（顔）
- #……海外、外国（アメリカ、中国、ブラジル）
- &……雇（う、え）
- 川……会社
- S……勉強・努力